

## 大学入学共通テスト試行調査 2018.11

## 生物

## 全体概要

制限時間	60分	配点	100点	大問数	5大問
出題分野	生物（4単位）				
難易度	※対現行センター試験 難				
解答形式	マーク式				
主な特徴	※対現行センター試験 実験考察問題が中心。単なる正誤の判定でなく、必要な実験を答える問題など現行試験とは傾向が大きく異なる。				

## 全体出題傾向

## ◆難度が高い考察問題が中心

問題の多くが考察問題で占められており、図や文章の解釈に時間を要する。そして、単純な正誤判定問題よりも、結果から推察されるものや矛盾しないものを選ぶ問題の割合が多くなっている。また「すべて選べ」という問題もあり、部分点があるとはいえ、受験生は苦労するだろう。ここ最近のセンター試験にこれらを意識した問題が出題されてきているが、そのレベルよりはるかに高く、用語の単純な暗記では太刀打ちできる問題ではなく、考察力、思考力をこれまで以上に鍛えなければならない。

## 対策

## ◆演習中心で知識を「使う」トレーニングを

まず、現行試験の過去問と試行試験のサンプルを解くことだろう。はじめの数年は過去問が少なく、演習の機会が少ないことがネックになるので、模試などで演習する機会を最大限に活用すべきである。現在、マーク形式で考察問題を出題する北里大（理）、東京理科大（理工、基礎工）の過去問の演習も対策になるが、傾向は同じとは言えないので注意すること。生物といえば暗記というイメージであるが、問題演習を中心にして、知識を「使う」トレーニングを積むことが重要である。

## 大問別コメント

## 第1問

Aは筋繊維に関する基本知識をあてはめていく問題であり、Bは筋収縮の消費エネルギーに関するグラフから、選択肢の文章の下線部部分の正誤を判定する問題である。直近の現行試験にもある形式であるので、現行試験の過去問演習で対応できる。

## 第2問

Aでは研究計画として適切でないものを選ぶ問題や植物のイラストから選ぶ問題など新傾向の問題が出題された。Bは光周性を中心とした問題であり、図から限界暗期など花芽形成の条件を見抜く問題である。また、ここから推察する穴埋め問題があるが、本問の条件に知識をあてはめる必要があるのが難しい。データの数値を単純に読み取るのではなく、条件が何を示すかなど考える必要があり、現行試験の問題とは大きく異なる。

## 第3問

ホメオティック遺伝子に関する文章を読んで考察する問題である。前後軸の形成に不可欠な性質を選ぶ問題では、選択肢がすべて正しい文章であるので、どれがあてはまるかが解らなければ解答できない。現行試験でも近年増えているタイプである。また、矛盾しない仮説をすべて選べという現行試験にはない形式の出題もあった。

## 第4問

個体群に関する問題であるが、表にあるグラフの値、そこから得られる数値の解釈などが必要であり、難関私大レベルの問題である。知識はそれほど必要としないが、問題文を把握し、その条件下で推察する必要がある。現行試験にはない形式および難易度である。

## 第5問

Aは現行試験の選択問題レベルである。一方で、Bは会話文形式の問題文を読んで考察する問題である。これも難関私大レベルの問題であり、どのような前提で計算すれば、登場人物が述べた誤った結果になるかを選ぶ問題が出題された。現場思考力が問われる形式であり、これも現行試験にはない形式である。